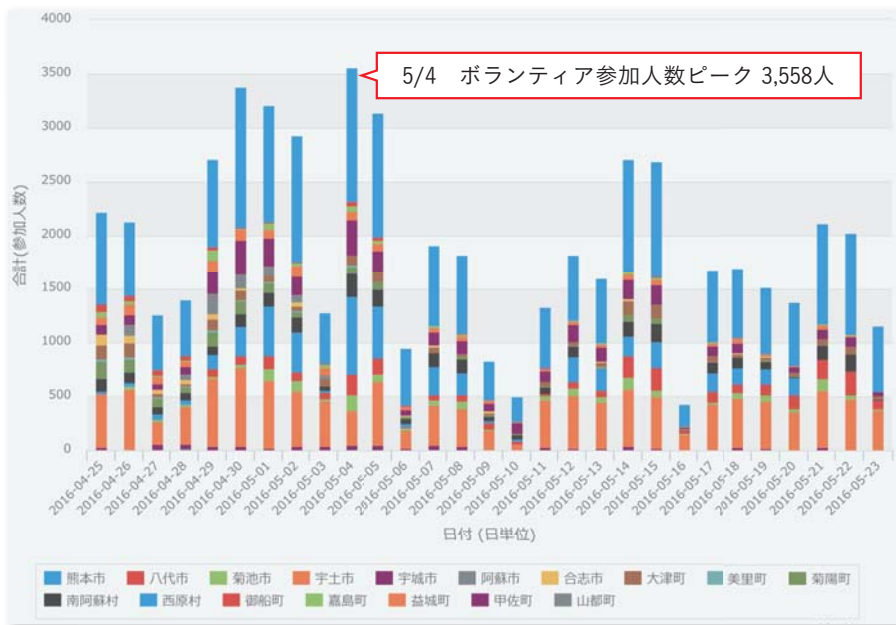




Volunteer

## これまで/これから 災害支援ボランティア

平成 28 年熊本地震発生後、  
全国各地からたくさんのボランティアが  
行動し支援を行っています。  
現在の状況を改めて確認し、  
また次の動きにつなげていきましょう。



市町村災害ボランティアセンター [参加人数グラフ]

被災地支援・災害ボランティア情報 熊本地震特設サイトより (<http://shienp.net>)

## 平成28年熊本地震 支援ボランティアの動き

### 7万人のボランティアが現地へ

4月14日と4月16日、最大震度7を記録した熊本地震。住家の被害は10万棟(5月29日現在)を超え、地震発生から約1ヶ月が経過した現在も熊本県内には避難所が約190箇所、8,600人を越える方が避難されています(5月27日現在)。余震は依然として続き、これから梅雨の時期を迎えるなど不安要因も多く、いまだ予断を許さない状況が続いています。

地震発生直後、自衛隊や災害復興支援の専門スキルを持ったNPO、NGOなどがいち早く動きはじめました。そして、数日後には全国から多数のボランティアが被災地を訪れ、物的支援や人的支援など、現地のニーズに合わせた活動を始めています。熊本県社会福祉協議会のホームページでは、各市町村に集ったボランティアの数が公表されています。参加人数がピークを迎えた5月4日は3,558人、

5月27日までの集計では延べ69,229人の方が現地に入り支援を行っています。

そしてこれからもボランティアの力は引き続き必要とされています。避難所の運営サポートや、被害を受けた方々の家屋のがれき撤去など、まだまだ人手が不足している状況です。場所によっては、住民の心のケアを目的とした傾聴活動や、子どもたちのケアなど、そのニーズも状況によって日々変化しています。行政や社会福祉協議会、NPOなどが発信する情報に耳を傾けながら、それぞれができることを継続して支援していきましょう。

### 福岡市による支援活動の特徴

福岡市では、まず4月15日より義援金の募集をはじめました。それから、救援物資の受入と輸送の実施、さらに5月中旬からはボランティア希望者が被災地に直

行し効率よく支援活動をするためのボランティアバスを運行するなど、震災発生後の「支援の段階」を意識した取り組みを行ってきました。また、高島市長がリーダーシップをとり進めた福岡市の一連の取り組みは、被災地の行政セクターやボランティアセンターなどに負担をかけない「自己完結型支援」であることが大きなテーマでもありました。

例えば、救援物資については、市民の方を集める物資をあらかじめ指定させていただき、まず一箇所に集めました。それを福岡市内で仕分けを行ったうえ、被災地に持ち込むことで、現地での作業負担を減らし、なおかつ必要な物資のニーズに素早く応えることができました。

裏面には、支援団体やボランティアのみなさんと、支援の現場に関わった関係者が情報交換を行った「平成28年熊本地震支援情報交換会」のレポートを掲載しています。ぜひご覧ください。

# 「平成28年熊本地震支援情報交換会」レポート

被災地では現在も、復旧、復興に向けた適切な支援活動ができるボランティアが求められています。そこで、あすみんでは、これからも被災地支援をしたいと考えている市民のみなさんを対象とした報告会&情報交換会を5月31日に開催しました。

## 届けることをあきらめない

今回の報告会で特に参加者の注目を集めたのが、福岡市の物資輸送支援を行うプロジェクトに参加した2つの団体からの貴重な報告でした。

最初の団体は「NPO法人がんばりよるよ星野村」。まだ記憶に新しい、平成24年7月九州北部豪雨の被災経験がある同団体、松永さんの発表では、『NPOのやるべきことは、毛細血管に血を流すこと』という言葉が印象的でした。物資は避難所などに届いてはいるが、自宅暮らし方や、福祉施設などには十分に行き渡っていないということがあり、電話で毎日確認するなど、NPOだからこそ出来る細かなニーズを掘り起こし、そこに必要なものを届けられるという発表内容でした。

そして2つ目の発表団体、精肉業を営む田中さんを中心とした「チーム田中屋」は、既に10回以上の炊き出しや物資提供



を行っています。物資や食料の提供だけでなく、兼業しているレンタカー事業で所有するトラックを被災地に貸し出すなど、惜しみなく私財を提供されています。現地に行くたびにニーズを聞き、すぐに次の動きに活かす柔軟さで現地の期待に沿う支援を実践されている田中さんの発言に、参加者は興味深く耳を傾けていました。

## 支援はまだまだこれから

次に被災地の現状報告や新しい支援の動きの紹介として、NPO法人福岡被災地前進支援の大神代表が登場。発災直後の緊急時の支援の仕方から、徐々に現場のニーズを踏まえた支援へと変わり始めていることを、いくつかの例を交えながら語りました。ボランティアをしたい方々のできることをつなぐWEBサイトの企画の紹介、被災された女性に向けた下着提供の支援、ボランティアの力を集結する田植えイベントの紹介など、NPOならではの発想や機動力を活かした支援があること、またそれらをまだまだやっていきたいという思いが伝わる発表でした。

また福岡市社会福祉協議会からは、最

新のデータを紹介。住家被害が、全壊、半壊など含め10万棟を超えたこと、ライフラインの復旧に伴い住居の修理や確保が本格化しており、熊本市や西原村、御船町、益城町での災害ボランティアは引き続き必要とされていることが報告されました。そして福岡市が5/15、5/22、5/29に実施したボランティアバス。6月から、この取り組みは福岡市社会福祉協議会ボランティアセンターが主体となり実施していきます。多くのボランティア参加を呼びかけました。

## ニーズを拾う大切さを確認

最後に意見交換会を開催。「物資支援」と「人的支援」の2つの班に分かれ、参加者の自己紹介、発表者に詳しく聞きたいことなどを中心とした意見のやりとりが行われました。物資支援の班では「行政だけでは届けられない支援をしたい」「現場で出会った方々に、しっかりニーズを聞く」「区長さんと会うなど、地域のネットワークを把握し、活かす」、人的支援の班では「福岡にいながらできることもたくさんある」「大きい小さいでなく、ニーズに沿ったいろんな活動ができればいいのでは」などの意見が出され、活発な発言が飛び交う熱気が感じられました。

現場で活動し、その目や肌でニーズを感じ取っている方々の意見は、参加者にとって非常に興味深いようでした。同じ九州に住む人間として、私たちができることは、まだまだこれから、たくさんあると実感できる会となりました。



## <参考> 福岡市の支援に関するデータ

(5月31日現在)

【義援金】1億1,500万円(第1次分、5/11熊本県に贈呈)

【物資輸送支援への参加件数】112件(NPO、企業、任意団体などの民間組織、個人)

【有志により輸送された物資の量】約10,000箱(水・タオル・おむつなど)

【福岡市災害ボランティアバス参加者】113名(3回の合計)